ヤスクニ通信　No.269　2022 年 8 月 19 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）　会場　NCC フリースペース（新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　269
先達の歴史に学ぶ姿に倣う

須田　毅牧師（日本福音キリスト教会連合　西堀キリスト福音教会）

この「靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い」の代表を長く務めた西川重則長老が地上の生涯を終えられて、早くも二年が過ぎた。当ヤスクニ通信の巻頭言は、西川長老が体調不良で倒れられた 2019 年夏に至るまで、毎月、長老が執筆されていた。92 才になっても、この通信以外にも複数の定期的な原稿執筆をされていた。しかも、手書きである。当ヤスクニ通信の原稿については、晩年の 1，2 年、私が国立のご自宅へ原稿を取りに伺い(長老は日中、国会傍聴などで不在であるので、ご自宅の郵便ポストに完成原稿を入れておいていただき、それを私が回収した)、ワープロ入力し、電子原稿を編集担当者へメール送信することが私の担当だった。今も西川長老の手書き原稿をいくつも保管しているが、改めて、西川長老の執筆の量と質が驚異的だったことを振り返る。

晩年の西川長老は、この巻頭言で繰り返し、「憲法改悪阻止のために、教会や市民運動などを横断しての、大集会を開催しようではないか」と呼びかけた。月例会の席上でも、その趣旨の発言をされた。その時、私自身は、西川長老の呼びかけについて積極的な応答はできなかった。「自分の教会や所属する団体では、護憲の意識はかなり後退しています。それを何とか阻止し、教会内の社会的課題への祈りの熱心さを盛り返したいと願っています。また、所属団体の同僚牧師がこの課題に冷めているところに、何とか理解を増してほしいと働きかけることが、やっとです」というような返答を、西川長老に申し上げた。例会出席者の皆さんは、当然に西川長老の発言の趣旨に同意しておられた。しかし、大集会の開催を実行するための具体的な提案などは無かった。1968 年頃の、靖国神社国家護持法案が廃案となった社会的状況の中の反ヤスクニ運動と重ねるような意味で、西川長老は語っておられたのではないか、と個人的には想像した。

いくつか、晩年の手書き原稿を見ると、失礼ながら、西川長老の衰えが見える。元出版社勤務ゆえに、以前は文章の論旨が明確であり、誤字脱字もなかった。ところが晩年のものは、多少、前後のつながりが不明瞭だったり、手書き原稿であるからか、前後を切り貼りして(文字通り、はさみで切って糊付けして)、つなぎ変えて作成くださった原稿もあった。しかし、そのような変化があっても、憲法改悪を止めようとする意志は変化がなかった。大集会をしようではないか、という呼びかけは、現実から乖離しているのではないか、という当惑が私にあったが、西川長老には何の躊躇も無い。とにかく、憲法の平和の理念を失うようなことがあってはならないと、素朴に、そして骨太に訴え続けておられた。大集会ということも、そのような各個人の熱心が集結するならば、「集い」が起点となり、実施は不可能でないと、西川長老は本気で考えていたのだろう。

西川長老は歴史的事実を尊重なさった。私の団体で靖国神社スタディーツアーを春の例大祭の時期に毎年実施し、西川長老にガイドしていただいた。毎回、いつもの大きな黒いバッグをもって、早めに現地入りしてくださった。半日ほどかかるツアーなので、黒バックを代わりに持たせていただいたが、それの重いことと言ったら、無かった。「90 のおじいさんが、こんな重い荷物をもって国会に行ったり、講演に出かけたりしておられるのか」と、驚いた。バッグの中身は、長老による著書の他、歴史年表などの資料だった。その場で、史実を確認することを良く為さった。戦争の悲惨も情緒的にならず、史実からその内容を捉えようとしておられたのだろう。そして、歴史的事実としての戦争の誤りを訴え、そして、社会的取り組みが教会の血肉化することを、誰に対しても、どの教会に対しても、望んでおられたのだろう。

イスラエルの民は、自分たちの父祖の歴史を数え、同時に父祖が神に逆らったことも数え上げる(詩篇 78 など)。神の民は、神の御前に父祖がどのように生きたかを確認した。神に対して罪ある生活を重ねたことも繰り返し確認したが、それは、むしろ神の選びに信頼することの確認作業のようである。キリスト者は、聖書の歴史に学び、2000 年のキリスト教会の歴史に学ぶ民である。日本のキリスト者だったら、第二次大戦下の教会の歴史にも学ぶべき

ことが多くある。今、私自身の課題として、私は第二次大戦下の教会の過ちの事実を、十分に理解することが不十分なままであり、以後の世代にその本質を伝えることができていない。戦争時代の認識が十分にできず、悔い改めも不完全なままの自分なのに、一次経験を語り、教えてくださった戦争時代を生きた世代が、ほとんど地上を去ってしまおうとしている。何とも言えない焦りと、自らの怠慢の恥ずかしさを覚える。

第二次大戦下の教会の御自身の経験を語る世代が少なくなるとの反比例し、「過去のことは私には関係ない。なぜなら、その時代にはまだ生まれてないから」とか、「教会内でも平和ボケせず、武力による安全保障を積極的に考えるべきだ」というような意見を聞くことが増えた。率直に申し上げると、落胆せざるをえない。いつの時代も、教会は世の力に巻き込まれやすい。だからこそ、その中で、まことの神のみを神として拝するという、信仰の中心点にたって、ヤスクニ問題・天皇制の課題に、長期的な視野をもって取り組んでいかねばならない。西川長老はじめ、この「集い」自身の歴史からバトンを受け継いで、学び続けなければならない。

２０２２年７月１５日例会奨励
「正義は国を高め、罪は国民を辱める」箴言１４章３４節
柴田　智悦牧師（日本同盟基督教団横浜上野町教会）

Ⅰ．今回の参議院選挙において、安倍元首相の銃撃死で、民主主義云々、言論封殺、という話がよく出た。しかし、犯人自ら言っているように、彼には政治的意図は全くなく、親が統一協会に破産させられたから、という個人的恨みからだった。それは、民主主義の問題ではなく政教分離の問題ではないか。しかし、選挙が終わるまで「ある宗教団体」という情報統制がされていた。それこそが、言論封殺であり、民主主義の崩壊ではないか。結果、選挙で与党が単独過半数を取り、改憲勢力が２／３を優に超えた。

Ⅱ．また今回、福音派の牧師が出馬したことで、キリスト教会内においても話題となった。教会を上げて祈り応援する様も、信教の自由、思想信条の自由に関わる問題ではないか。さらに「日本維新の会」から出馬しながら、これほどの支持を集め当選した。自民党よりも急進的な「日本維新の会」にこれほどの福音派教会が応援に回る様は、さながら、共和党を支持するネオコンとアメリカ福音派の関係のようだ。

しかし、この牧師の NHK のアンケート調査への回答によれば、憲法改正、9 条への自衛隊明記、緊急事態条項の新設に賛成であるから、維新の会の主張と意見を同じくしている。これこそが改憲派の目指すところなのである。今回の選挙で改憲勢力が２／３を超えてしまった今、憲法改正発義は時間の問題とも言える。このことを応援団はどれだけ理解しているだろうか。

Ⅲ．この選挙応援で「すべての人々のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい」(1 テモテ 2:1)という御言葉がよく引用された。確かに「すべての人々のために」祈るべきだから、政治家のためにも祈るのは当然である。しかし、彼らが「高い地位にある人」ではなく、かえって我々国民が主権者なのだ。彼らは「公僕」にすぎない。我々は、彼らに、我々の益となる政治をさせるために選挙をするのだ。そこを勘違いして、この箇所を用いるべきではない。そして、「牧師として、神を愛し、国を愛し、隣人を愛す」というスローガンに最も違和感を持った。イエス様は、「神、主を愛し」「隣人を愛しなさい」（マタイ 22:37-40）と、最も大切な戒めとして教えられた。かつて、神よりも国を愛した時代を忘れたのか。今の「時のしるしを意味分け」て、正しい歩みをしたい（マタイ 16:3）。

「本の紹介」――――――――――――――――――――

■福嶋揚著『カール・バルト　未来学としての神学』（日キ販、2018 年）

星出卓也

カール・バルトと言えば、批評学を受け入れない聖書信仰に立つ立場からは、聖書の啓示論等で考え方の違いも目立つ。ところがバルトから学ぶべきことは非常に多く、本書の３章「未来は自由と愛に満ちている・バルト神学の展開」での「政治的礼拝と抵抗権」は、神の言葉を置かれた時代において読み、語り、告白するということにおいて、大きな示唆を与えているのはバルトが残した大きな財産である。ナチへの抵抗に関して「他者のために生きる教会」の本質を論じ、肥大化した資本主義の悪魔性に鋭く抵抗し、それに代る社会の在り方の先駆的な視座を持っていた。バルトの戦後の戦争に関しての考えの変遷も非常に興味深い。分かり易い解説書。